

~~~~~  
**研 究**  
 ~~~~~

看護学生の避妊行動に関する意識

堂上 優美¹⁾, 泊 祐子²⁾

〔論文要旨〕

本研究では、意思決定の一つとして避妊行動に焦点をあて、看護学生の避妊に対する意識を明らかにし、今後の性教育の指針を考察することを目的として、看護学生を対象にアンケート調査を行った。その結果、性教育を受けているにも関わらず避妊行動をとっていない者が多いこと、また、避妊しない理由から、正確な知識の不足、現実生活に対してのリアリティのなさ、自分自身を大切にできない自尊心の低さ、避妊に対して相手任せで主体性のなさがうかがわれた。これにより、正確な知識を提供し定着させること、その知識をもとに避妊行動をとれる意思を育てること、自尊心を向上させることが必要であると考えられた。避妊などの具体的内容についてとともに知識が行動に結びつく教育方法の検討の必要性が示唆された。

Key words : 避妊行動, 避妊意識, 性教育, 看護学生, 性交経験

I. はじめに

近年、さまざまな調査によって、性行動の低年齢化と性感染症の若年化傾向がみられる¹⁾。厚生労働省の感染症動向調査によると10代の性感染症動向調査並びにセンチネル・サーベイランス研究班の報告によると、若者女性STD浸透が深刻となっている。とくに若年者に多いと注目されているクラミジア感染症は女性が多い²⁾。また、人工妊娠中絶では全体の件数が減っているのに対し、十代の人工妊娠中絶の件数が増加している³⁾。

このような背景の一つに若者の性意識や行動の変貌に性教育が対応しきれず、ニーズに合った性教育が行われていないのではないかと考えた。人が生きていくうえで自分自身を大切に、さまざまなことを自分で意思決定できることが重要であり必要である。

そこで本研究では性行動の意思決定の一つである避妊行動に焦点をあて、将来、性教育を担

うであろう看護学生を対象に、避妊に対する意識を明らかにし、今後の性教育のあり方を検討することを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究対象

看護学を学んでいる青年期の学生を対象に、大学1校、専門学校2校の在籍者407人に調査を行った。有効回答数は227 (回収率55.7%)であった。そのうち、30歳以上と男性、既婚者を除き205人を対象とした。

2. 調査方法

無記名の自記式質問紙調査票を配布し、記入後回収箱にて回収した。

3. 倫理的配慮

調査依頼書には研究の主旨とプライバシーが守られ個人が特定されないこと、回答は自由意思であることを明記した。質問紙は記入後各自

The Consciousness on Contraception Behavior of the Nurse Students.

Yumi DOUE, Yuko TOMARI

1) 京都市立藤ノ森小学校養護教諭(教育職) 2) 岐阜県立看護大学(教育・研究職)
 別刷請求先: 泊 祐子 岐阜県立看護大学 〒501-6295 岐阜県羽島市江吉良町3047-1
 Tel/Fax : 058-397-2338

[1751]

受付 05. 8.31

採用 06. 3. 8

で封筒に入れ密封し回答が分からないように回収した。

4. 調査期間

平成15年9月9日～25日

5. 調査内容

1) 年齢, 学年, 性別, 婚姻状態, 2) 性教育を受けた経験, 3) 避妊教育を受けた経験, 学習方法, 4) 性交経験, 5) 避妊頻度, 避妊方法, 6) 避妊方法についての情報源, 7) 避妊しない理由, 8) 避妊しない意識, 9) 性交未経験者の避妊意識

6. 分析方法

統計ソフトSPSSを使用し, 一元配置分析を行った。

Ⅲ. 結果

1. 対象の特性

対象205人の平均年齢は20.24歳であり, 年齢と学年別の人数を表1に示した。

2. 性教育について

1) 性教育を受けた経験

対象者全員が今までの学校教育において性教育を受けていた。

表1 調査対象の特性

	実数	(%)
年齢: 18歳	40	(19.5)
19歳	39	(19.0)
20歳	65	(31.7)
21歳	34	(16.6)
22歳	3	(1.5)
23歳以上	22	(10.7)
無回答	2	(1.0)
平均年齢	20.24歳	
学年: 1年生	87	(42.4)
2年生	41	(20.0)
3年生	75	(36.6)
無回答	2	(1.0)

n=205

2) 学習内容

性教育での学習内容を複数回答で尋ねると, 「月経」が最も多く198人(96.6%), 次いで「二次性徴」190人(92.7%), 「エイズ」188人(91.7%)であった。

3) 性教育の印象

性教育で教わった事柄は役に立つと感じたかという質問に対し, 「役に立つと感じた」は119人(58.0%), 「役に立たないと感じた」は11人(5.4%), 「どちらともいえない」は75人(36.5%)であった(図1)。性交経験のある者とない者で, 性教育の有効感に有意差はなかった。

4) 避妊教育を受けた経験

避妊について教育を受けたことのある人は性教育を受けた205人中187人(91.2%)で, 避妊について教育を受けたことのない人は18人(8.8%)であった。

5) 避妊についての学習方法

避妊について習った時期では, 高校, 中学, それ以降, 小学校の順に多かった。

習った方法では, 「プリント・教科書など書いてあるもので説明を受けた」, 「ビデオなどで具体的に習った」, 「実際に避妊具を手にとって使用方法を聞いた」, 「模型を使って説明を受けた」の順であった。

3. 避妊について

1) 性交経験の有無

性交経験者は132人(64.4%), 未経験者は73人(35.6%)であった。学年が高くなるにつれ, 性交経験者が増加していた(表2)。

2) 避妊頻度

性交経験者のうち, 避妊を「いつもしている」56人(42.4%), 「ほとんどしている」42人

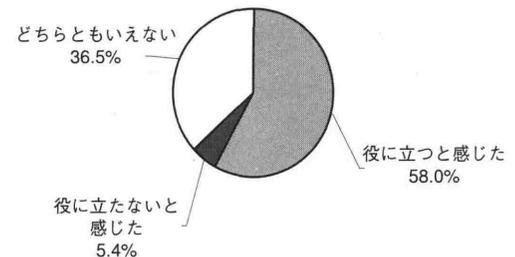


図1 性教育の印象

(31.8%), 「時々している」29人 (22.0%), 「全くしていない」5人 (3.8%) であった。

3) 避妊方法

実行している避妊方法は、表3に示すように、「コンドーム」が最も多く120人 (90.9%), 次いで、「月経から日数を数える」、「膣外射精」であった。「月経から日数を数える」、「膣外射精」という方法は、避妊頻度の低い人の方が有意に多く用いていた ($p < 0.001$) (表4)。

4) 避妊方法についての情報源

行っている避妊の具体的な方法を、誰または何から知ったかを複数回答で問うと、「性教育の授業」89人 (70.1%), 「友人」73人 (57.5%) の順に回答が多く、次いで「恋人」56人 (44.1%), 「雑誌 (週刊誌・月刊誌)」50人 (39.4%) であった (図2)。

また、行っている避妊方法を性教育で習ったとした人のうち、「いつも避妊している」人は38

人 (42.7%) であり、51人 (57.3%) が避妊を「ほとんどしている」、「時々している」と答えた。

5) 避妊しない理由

避妊をいつもしていると回答した以外の76人に、避妊しない理由を複数回答で尋ねた。その理由は「大丈夫だと思うから」36人 (47.4%), 「手元に避妊具がないから」、「雰囲気損なわれるから」、「面倒くさいから」の順であった (表5)。

そのほかに、「相手が避妊してくれないから、避妊したがらなかったから」、「避妊すること自体忘れていた時があるから」、「なんとなく、特に意識していない」、「避妊具購入に恥ずかしさを感じるから」、「子どもができてもいいかなという気持ちがないわけではないから」という意見があった。

表2 学年別の性交経験

	実数 (%)	
	性交経験あり	性交経験なし
1年 (n= 87)	49(56.3)	38(43.7)
2年 (n= 41)	27(65.9)	14(34.1)
3年 (n= 75)	54(72.0)	21(28.0)
合計 (n=203)	130(64.0)	73(36.0)

表3 避妊方法

	人	(%)
コンドーム	120	90.9
月経から日数を数える	26	19.7
膣外射精	25	18.9
基礎体温を測る	8	6.1
ピル	2	1.5
フィルム状避妊薬	1	0.8

複数回答
n=132

表4 避妊頻度別の避妊方法

避妊方法 (複数回答)	実数 (%)			
	避妊をいつもしている	ほとんどしている	時々している	有意差
コンドーム	53(94.6)	39(92.9)	28(96.6)	
ピル(経口避妊薬)	0(0)	2(4.8)	0(0)	
フィルム状避妊薬	0(0)	1(2.4)	0(0)	
荻野式	2(3.6)	11(26.2)	13(44.8)	*
基礎体温を測る	2(3.6)	5(11.9)	1(3.4)	
膣外射精	3(5.4)	8(19.0)	14(48.3)	*
女性用コンドーム	0(0)	0(0)	0(0)	
その他	0(0)	0(0)	0(0)	
合計 (n=132)	56(42.4)	42(31.8)	29(22.0)	

* $p < 0.001$

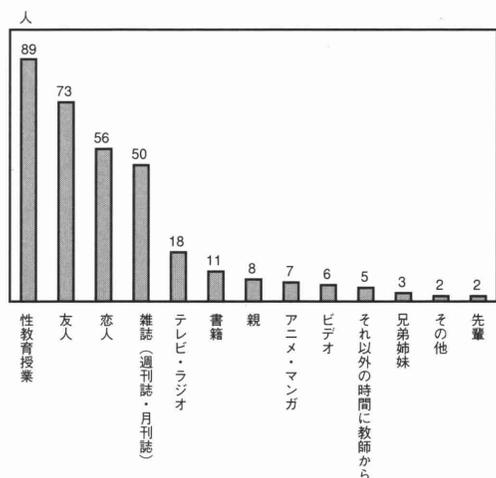


図2 避妊方法の情報源

6) 避妊しない意識

「避妊せずに性交することを怖いと感じたことはあるか」という問いに対し、122人(92.4%)が「怖いと感じたことはある」と回答しており、「怖いと感じたことはない」は10人(7.6%)であった。しかし、避妊頻度別にみると、「いつも避妊している」群の100%が怖いと感じているのに対し、「ほとんどしている」群42人中4人(9.5%)、「時々している」群29人中5人(9%)、「全くしていない」群5人中1人(20%)が怖いと感じたことはなかった。また、「怖いと感じたことはある」と回答した122人のうち、「毎回避妊していない」が66人(54.0%)であった。

7) 性交未経験者の避妊意識

性交未経験者73人に対し「あなたが性交するとすれば避妊したいと思うか」と尋ねたところ、「避妊したいと思う」65人(89.0%)、「その時になってみないとわからない」8人(11.0%)、「避妊したいと思わない」人はいなかった。

さらに避妊する時はどの避妊方法を用いるかについて複数回答で尋ねると、表6に示すように「コンドーム」、「月経から日数を数える」、「基礎体温を測る」の順であった。どのくらいの頻度で避妊を実行できると思うかについて、「いつもする」54人(74.0%)、「ほとんどする」12人(16.4%)、「時々する」5人(6.8%)、「あまりしない」2人(2.7%)であった。

表5 避妊しない理由

	実数	(%)
大丈夫だと思うから	36	47.4
手元に避妊具がないから	28	36.8
雰囲気損なわれるから	15	19.7
面倒くさいから	14	18.4
性交の楽しみが損なわれるから	13	17.1
避妊を言い出せないから	6	7.9
避妊具購入に費用がかかるから	5	6.6
性感染症の可能性がないから	3	3.9
慣れていると思われたくないから	1	1.3
その他	12	15.8

複数回答
n=76

表6 性交未経験者の選択したい避妊方法

	人	(%)
コンドーム	69	94.5
月経から日数を数える	26	35.6
基礎体温を測る	19	26.0
膣外射精	6	8.2
ピル	5	6.8
女性用コンドーム	4	5.5
フィルム状避妊薬	0	0
その他	1	1.4

複数回答
n=73

IV. 考 察

1. 性交経験の増加と避妊の不確実さ

本調査では性交経験のある者は64.4%であり、この数値は1999年の全国調査における大学生女子50.3%⁴⁾より高値であるうえに、本調査での避妊頻度は、「いつもしている」が43.1%と、先の調査の大学生女子65.9%⁵⁾より低かった。本調査での避妊の具体的な方法の情報源は、「性教育の授業」が70.1%の回答であり、行っている避妊方法を性教育で習ったと回答した人のうち、いつも避妊している人はわずか42.7%であり、半数以上の者が毎回確実に避妊をしていなかった。本調査の対象者は医療を学び知識があるとされる看護学生であることを考慮すると、知識が実行に結びついていないという重大な問題を提起していると考えられる。

さらに、避妊方法には、「荻野式(19.7%)」、

「膣外射精 (18.9%)」という不確実な方法がそれぞれ約2割を占めていた。避妊頻度の低い者ほど荻野式、膣外射精といった不確実な方法を避妊方法として選択していることが明らかになった。性教育を受けているにも関わらず、避妊行動をとっていない者が多いこと、正確な知識が定着しておらず、あやふやな知識のままであるために、誤った避妊行動をしている可能性が示唆された。避妊方法のHow toとともに、それを実行できる意思決定の強さを教える必要があることが再確認できた。

2. 妊娠するリスクへの認識

避妊しない理由として、「大丈夫だと思うから」が最も多く、次いで「手元に避妊具がないから」、「雰囲気損なわれるから」、「面倒くさいから」と続いた。「大丈夫だと思うから」というのは知識不足も原因の一つであると考えられた。「手元に避妊具がないから」、「雰囲気損なわれるから」、「面倒くさいから」というのは避妊に対する確固たる意識や意思が低く、その場に流されていることが考えられた。避妊せずに性交して妊娠したらどうなるかということにまで考えが至っていないと思われた。

その他に「相手が避妊したがらなかったから」、「避妊すること自体忘れていた時があるから」、「子どもができてもいいかなという気持ちがないわけではないから」という回答もあったが、対象者は在学中であり、妊娠すれば、人工妊娠中絶の選択に迫られるか、学業の継続が困難になるため、将来設計の意識の低さがうかがえた。

2001年の羽入の調査⁶⁾結果においても、性行動によってもたらされる可能性があるリスクへの責任感の低さ、相手や自分を大切にしている気持ちの低さを指摘していた。さらに、性行為をする意味や性行為によってもたらされるリスクとその予防方法を明確に伝え、性行為するかしないかを自己決定でき、相手や自分を尊重し責任ある行動がとれるように支援していく必要があると指摘していた。本調査の結果でも同様に、知識不足や現実生活に対してのリアリティのなさ、自分自身を大切にできない認識の低さ、避妊に対して相手任せで主体性のなさがうかがえた。

た。

避妊しない性交を怖いと感じたことは92.4%の人がいるにも関わらず、そのうち54.0%が必ずしも避妊していない。これは避妊しない性交を怖いと感じる意識と実際の避妊行動が結びついていないことが考えられた。ここでも妊娠したらどうなるかということを考えられないリアリティのなさがうかがえた。

性教育の授業において、避妊方法について正確な知識提供を図ることは必要不可欠であるが、知識があっても、リアリティのなさや自尊心の低さのために、知識をもとに行動できないことを示している。避妊行動をとるためには、自尊心の向上や、意思決定できる力が重要であり、それには性教育という限られた範囲ではなく、教育全体でアプローチしなければならないと考えられた。

V. 結 論

本研究では避妊に対する意識を明らかにすること、また、今後の性教育の指針について明らかにすることを目的に調査を行い、以下の結論を得た。

1. 性教育を受けているにも関わらず、避妊行動をとっていない者が多いこと、正確な知識が定着しておらずあやふやな知識のままであるために誤った避妊行動をしている可能性が示唆された。
2. 避妊しない理由から、看護学生においても知識不足や現実生活に対するリアリティのなさや、避妊に対して相手任せで主体性のなさがうかがえた。そのため、避妊を意思決定できる力を身につけさせる必要性が示唆された。

本調査には多くの方々にご協力いただきました。ご協力いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。また、調査にあたって、貴重なご助言や資料の提示をいただきました野洲病院看護部長大槻知子様深く感謝致します。

本論文の一部は第51回日本小児保健学会（盛岡）で発表した。

文 献

- 1) 竹村 喬, 他. 思春期における妊娠前の保健指導. 産婦人科治療, 2002; 85(3): 302-307.
- 2) 1) 前掲書. 304.
- 3) 入内嶋明美. 助産所における思春期保健教育と相談. 周産期医学, 2002; 32(4): 488.
- 4) 財団法人日本性教育協会編: 「若者の性」白書 — 第5回青少年性行動全国調査報告 —. 小学館, 2001; 190.
- 5) 財団法人日本性教育協会編前掲書. 195.
- 6) 羽入雪子, 他. 大学生の避妊および低用量ピルに関する意識. 日本赤十字秋田短期大学紀要, 2002; 7.
- 7) 財団法人日本性教育協会編前掲書. 76.
- 8) 佐藤香代, 他. 大学生の性の実態とこれからの性教育 — 助産の視点から —. 母性衛生, 2001; 43(1): 28-35.
- 9) 笹原理会, 他. 大学生の性感染症に関する意識と知識の現状 — 性教育改革の必要性 —, ペリネイタルケア, 2001; 20(8): 82-87.
- 10) 木原雅子, 他. 大学生のピルに対する認識と性行動に関する研究. 日本性感染症学会誌, 1997; 8(7): 127-135.